「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	令和元年 10 月 24 日
所属部局・職	公益財団法人日本モンキーセンター・附属動物園部
氏　名	石田 崇斗

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

タンザニア・ゴンベ国立公園、セルー動物保護区

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

野生動物を観察し、飼育下との比較をする、タンザニアの文化・生活にふれる

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

令和元年 9 月 6 日　～　令和元年 9 月 15 日　（10 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

大阪大学／日本学術振興会 特別研究員 PD 斎藤美保氏

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

行程

9 月 6 日（金）：成田空港発　移動
7 日（土）：エチオピア・アディスアベバ空港経由　ダルエスサラーム着
8 日（日）：キゴマ市内観光、ゴンベ国立公園へ移動
9 日（月）：ゴンベ国立公園にてチンパンジートレッキング、ムワンゴンゴ村見学
10 日（火）：ゴンベ国立公園にてチンパンジートレッキング、キゴマへ移動
11 日（水）：ダルエスサラームへ移動
12 日（木）：セルー動物保護区でゲームドライブ、ボートサファリ
13 日（金）：セルー動物保護区でゲームドライブ、ダルエスサラームへ移動、市内観光
14 日（土）：ティンガティンガ村、スリップウェイ見学、ダルエスサラーム発
15 日（日）：成田空港着

所感

今回、日本モンキーセンタータンザニア生息地研修第 7 班として、タンザニアを訪れる機会をいただいた。
これまでに生息地研修で、国内では宮崎県の幸島や鹿児島県の屋久島、国外ではカリマンタン島（ボルネオ）サバ州に行かせていただいた。どの研修も大変有意義で、素晴らしいものであった。だが、幼い頃から野生動物への憧れを抱いていた私にとって、野生の王国アフリカ・タンザニアへ行けることはこの上ない喜びで、研修メンバーに選ばれたときは飛び上がるほどに嬉しかった。経験者の方々から話を聞き、タンザニアに関する本や動物図鑑を読み、万全の装備を整えて本研修に臨んだ。

9 月 6 日（金）～ 7 日（土）成田空港からエチオピア・アディスアベバ空港を経由してタンザニア・ダルエスサラームに到着した。 20 時間以上の移動であったが、興奮と期待感からか、さほど疲労感はなかった。到着したダルエスサラーム空港はとても綺麗で、私が想像していたアフリカとは違っていた。ダルエスサラームの街も同様で、高い建物が立ち並び、思っていたよりも近代的な印象を持った。宿泊したホテルも綺麗だった。気候は日中は日差しが強いが、日陰に入れば涼しくて過ごしやすかった。日本のほうがよほど暑く感じた。

8 日（日）目的地の一つである、ゴンベ国立公園へ訪れるために、ダルエスサラームから国内線でキゴマへ向かった。到着したキゴマの街は高い建物はなく、道路も赤土が剥き出しの部分が多くて、やっと「アフリカに来た」という感じがした。市場を見学する時間もあった。市場では食料品や生活雑貨、伝統的な布製品などが売られていた。見知らぬ地の狭い路地を歩き、たくさんの人に声をかけられるのは少し恐怖もあったが、それも経験だと割り切って楽しんだ。その後はボートでタンガニーカ湖をのぼり、ゴンベ国立公園へ向かった。約 2 時間乗ったボートは噂通りの凄まじい揺れだった。この揺れを記録に残そうとビデオを回したが、手振れ補正機能が働いて、後日見直した際に愕然とした。ゴンベ国立公園到着後、すぐにアヌビスヒヒがお出迎えしてくれた（図１）。街中で鳥やトカゲなどはすでに見ていたが、野生動物らし

い野生動物の初登場にボートの疲れは一気に吹き飛んだ。日本モンキーセンターでもアヌビスヒヒを約 70 頭飼育しており、私も毎日のように見ているが、やはり森の中でのびのびと暮らす野生の姿は素晴らしいものだと感じた。だが、人をまったく怖がらず、扉に鍵をかけていないと部屋に突撃してくるなど、怖いもの知らずなところや、図々しいところはどこのヒヒも同じだなとも感じた。その他、水辺の散策中にアカオザルも発見した（図 2）。夕陽に照らされた姿は大変美しかった。

図 2, 屋根のぼるアヌビスヒヒ

図 1, 夕日に照らされるアカオザル

9 日（月）いよいよ森へチンパンジートレッキングへ向かった。ゴンベ国立公園には 3 つのチンパンジーの集団が生息している。私たちが見られるのは、人に慣れているその中の 1 集団である。チンパンジーを探すのは、鬱蒼と生い茂る森をかき分けながらだと勝手に想像していたが、実際はトレッキングルートがある程度整備されており、とても歩きやすかった。幸運なことに、20 分ほど歩いたところでチンパンジーに出会うことができた。出会うことが出来たといっても、高さ 30m はあろうかという樹上におり、望遠レンズを使ってようやく観察することができた。出会ったのは Gremlin（♀47 歳）と息子の Grend（♂3 歳）、それと生後約 3 週間のアカンボウの 3 頭である。ゴンベのチンパンジーは生後 3 年は死亡率が高いため名前をつけないと聞いた。最初は樹上にいた彼らを首を痛くしながら観察していたが、しばらくすると地面に降りてすぐ近くを歩いていった。日本で野生のニホンザルを見たことがあったが、同じように野生のチンパンジーが自分の目の前で、隔たりもなく同じ空間にいるというのは、何とも不思議な感覚であった（図 3）。それと同時に大変感動した。その後はゴンベのチンパンジーの観察ルールに則り観察を終えた。帰りの道中でチンパンジーに捕食されたと思われるブルーモンキーの死骸を発見した（図 4）。身体にほとんど外傷はなかったが、頭部の脳の部分のみ綺麗に食べられていた。チンパンジーが他の霊長類を捕食するというのを話には聞いていたが、実際にその痕跡を発見することができたのは嬉しかった。

トレッキング終了後は隣村のムワムゴンゴ村を訪れた。村内の施設などを案内していただき、現地の人々の生活を垣間見ることができた（図 5）。また私は子どもたちとのサッカーも楽しんだ。言葉が通じなくともコミュニケーションをとれるスポーツはやはり素晴らしいものだと感じた。また、村の女性たちによる伝統的な踊りも披露していただいた。ムワムゴンゴ村を訪れた際に印象的だったのは、ゴンベ国立公園との境界から先は一気に森林が伐採されていたことである。大部分はパームヤシが植えられていた。野生動物を守るうえで森林保護はが重要なのは重々承知しているが、現地の人々の生活を目の前にすると、なかなか難しいのだなと感じ、なんとも複雑な気持ちになった。

この日の夕方には Jane's house にて、Dr. Anton Collins 氏にお話を伺うことができた（図 6）。Anton 氏は、ゴンベ国立公園にてヒヒの研究を長年にわたり継続されている方である。ヒヒやチンパンジー、Dr. Jane Goodall 氏についてお話していただいた。

図 4, 目の前を歩いてゆくチンパンジーの親子

図 3, ブルーモンキーの死骸

図 6, 村の子どもたちと記念撮影

図 5, Jane's house にて

10 日（火）前日と同様にチンパンジートレッキングに向かった。この日も幸運なことに 20 分程度歩いたところでチンパンジーに出会う事ができた。最初は 1 頭だったのが、どこからともなく 1 頭増え、2 頭がくつろいでいるとまた 1 頭増え、と続々と集まってきて、最終的には 8 頭が集まった。目の前を横切っていきながら森中からチンパンジーたちが集まってくる様子は圧巻だった。チンパンジーたちは私たちのことを特に気にすることもなくくつろいでおり、グルーミングや遊びの様子を観察する事ができた（図 7）。その後はかつて Dr. Jane Goodall 氏がチンパンジーたちを探すのに利用した山頂まで登った。山頂からは確かにゴンベの森を一望する事ができたが、ここからチンパンジーたちを探すのは大変な苦労だなと感じた。また、下山中にもチンパンジーの 1 頭に出会えた。この日だけで 9 頭のチンパンジーに出会う事ができた。チンパンジー以外にもアカコロブスが樹上を飛び交う姿なども観察することができ（図 8）、とても有意義な時間をゴンベ国立公園ですごすことができた。

図 7, 目の前でくつろぐチンパンジーたち

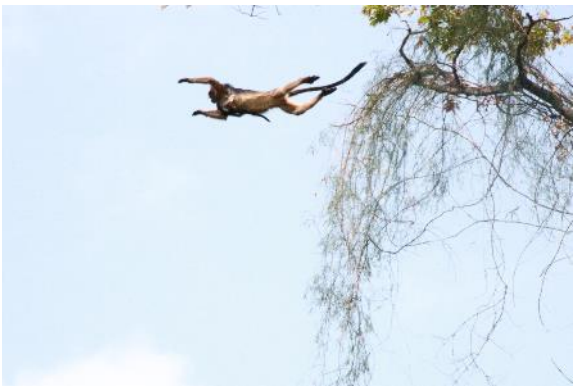

図 8, 木から木へジャンプするアカコロブス

11 日（水）キゴマからダルエスサラームへ戻り、空いた時間に工芸品のカンガなどを見に行った。お店の方々は観光客に対しての勧誘がすさまじかった。驚いたのが私たち日本人のことを「イエロー」と呼ぶことだ。黄色人種のことを指しているのだろうが、色で人種を分けるのが差別に当たるのは世界共通の認識だと思っていたので衝撃だった。値切るのが基本だと聞かされていたので、拙い英語で頑張った。結果満足いく買い物ができた。

12 日（木）ダルエスサラームからセスナ機でセルー動物保護区へ向かった。セスナに乗るのは初めてだったが、大型の航空機に比べて揺れや振動がもろに感じられ、ラジコンの飛行機に乗っているようで楽しかった。ダルエスサラームを発って約 45 分、降り立ったセルー動物保護区は赤土に乾いた空気、木々も疎らな、いかにも「サバンナ」という雰囲気で気分が高揚した。動物を観察する用に改造された LAND ROVER でロッジに向かうわずかな道中で早速キリンに遭遇した。こんなに早く野生動物に出会えるとは想像していなかったので、この後のゲームドライブへの期待感に胸が膨らませた。ロッジに到着後、さっそくゲームドライブへ出発した。道中はキリンやシマウマ、バッファローやヌーなどテレビでしか見たことのないような野生動物たちに出会う事ができた（図 9、10）。憧れのアフリカ、サバンナの野生動物たちの登場に夢中でカメラのシャッターを切った。ライオンにも出会う事ができた（図 11）。吐息が聞こえるような距離で観察したライオンは驚くほどにおとなしく、大きな猫のようで、まったく恐怖は感じなかった。霊長類ではキイロヒヒやベルベットモンキーを見ることができたが、最も感動したのは、ゲームドライブから

戻り、ロッジで休憩している際に出会ったアンゴラコロブスである（図 12）。もっと常緑樹の茂る森林にいるものだと思い込んでいたので、こんな乾燥している場所で出会えるとは思っていなかった。木々を白い毛をなびかせながら飛んでゆく姿はとても美しかった。夕方にはボートサファリに向かった。水の中の様子が全く分からないほどに濁った川には大量のカバやワニがいた。「ここに落ちたら一巻の終わりだろうな」なんて想像しながら、川から野生動物たちの観察を楽しんだ。ボートサファリ終了後は夕食を済ませて、各々自由時間を楽しんだ。宿泊したロッジはとても綺麗だったが、夜は野生動物に襲われる危険があるため、移動する際にはマサイ族の方の護衛が付いた。アフリカならではの経験をすることができた。

図 9, キリン

図 10, バッファローの群れ

図 11, ライオンの兄弟

図 12, アンゴラコロブス

13 日（金）本来であれば朝からウォーキングサファリの予定だったが、前日発見する事ができなかったゾウを探すためにゲームドライブに変更した。ゾウの足跡や糞などの痕跡はあるものの、なかなか出会えず、もう無理かと諦めかけたときにようやく遠くに発見する事ができた（図 13）。距離はあったが、野生動物を探してようやく出会える感動を味わう事ができた。その後は多くの野生動物に出会えたセルー動物保護区を、後ろ髪を引かれる思いでダルエスサラームへ戻った（図 14）。

図 13, 遠くに発見したアフリカゾウの若雄

図 14, ガイド、マサイ族の方と記念撮影

14 日（土）この日は朝から、ティンガティンガ村やスリップウェイなどでお土産などを購入した。買い物の際は、拙い英語やタンザニア滞在中に覚えた、さらに拙いスワヒリ語を駆使して、値引き交渉をおこなった。意思の疎通は大変ではあったが、現地の人々との交流は楽しかった。その後、ダルエスサラーム空港から成田空港へ帰路についた。

総じて、本ツアーは非常に有意義であった。筆舌尽くしがたいほど充実した 10 日間であった。 本出張を通じ、同定できるだけでも 57 種類の野生動物に出会うことができた。また、野生動物だけでなく、さまざまな町や人々、文化に出会うことができた。また、体調不良や大きなトラブルもなく研修を終えることができた。タンザニアに限らずいろいろな国や地域にでかけ、見聞を広めていきたいと思った。

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@wildlife-science.org】宛にご提出ください。

６．その他（特記事項など）

本出張において，大変多くの方にお世話になりました。本ツアーへの参加の機会を与えていただき、準備にあたって色々とご手配いただいた PWS リーディング大学院の皆さま、公益財団法人日本モンキーセンター松沢哲郎 所長、伊谷原一 園長、株式会社マイチケット藤原氏に感謝申し上げます。大阪大学／日本学術振興会 特別研究員 PD の斎藤美保氏には、通訳や案内をはじめツアー中多岐にわたってご支援いただきました。深く感謝申し上げます。ゴンベ国立公園でお話をお聞かせくださった Dr. Anton Collins 氏、タンザニアでお世話になりましたドライバー、トラッカー、ガイドの皆様、そしてツアー同行者の皆さまに深く感謝申し上げます。